# バ・ベルの王～幸せを手に～

ガンデム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バ・ベルの王～幸せを手に～

【Ｎコード】
Ｎ１９９５Ｋ

【作者名】
ガンデム

【あらすじ】
永劫の時を生きたベルの王。長き時の中、彼は忘れてしまった。人間らしさと言うものを。ただ意味もなく生きてきた破綻者の彼は、望まぬ召喚を機に、幸せを求めた。ベルの王と天使レミエルの幸せを求める旅が今始まる。＊この話は女神異聞録デビルサバイバー。アマネルート後、永劫の時を生きた主人公のお話です。必然的に、最強物になっております。
ネギまと女神異聞録デビルサバイバーのクロス。

## ００１　召喚されて（前書き）

ｈｔｔｐ：／／ｄｓ．ａｔｌｕｓｎｅｔ．ｊｐ／ｃｈａｒａｃｔｅｒ／ｉｎｄｅｘ．ｈｔｍｌ

此処にどんなキャラか載ってます。
女神異聞録デビルサバイバーの公式サイトです。
主人公は中心。アマネは右下。

# 001　召喚されて

―――ベルの王

永遠と荒野が続くような場所。常人ならば訪れようとさえ思わないそんな場所。そこに、一組みの男女が棒立ちしていた。何をするわけでもなく、ただそこに立っているだけ。まだ幼さの残る顔立ちの少年と少女。

少年は空を仰ぎ、うつろな目を天に向けている。蒼い髪を持つ、中世的な顔立ち。薄手の黒い服を着、スレンダーな赤いジーパンをはいている。耳には白く、大きなヘッドフォンを着け、真っ赤なコードが服の内側に繋がっている。

少女は愛おしそうに少年にすがりつき、肩口まである紫色の髪を少年に撫でられつづけた。スカート丈の長さまであるオレンジ色のパーカーを着て、大きな白い花のヘアバンドを着けている。

もし、この二人を見た人間が居れば、真っ先に逃げ去るだろう異様さを放っている。

二人はただただ無表情に、その場に立っていた。千人を超える死者達が転がる荒野の中で。外傷すらない死者達。二人はどうでもいいとばかりに、立ち続ける。

少女が少年にキスをし、少年がそれを返す。ただ、表情は僅かほども動かさない。しているだけのキス。

「……愚かな。何故僕を呼ぼうとなど思ったんだろう……命を無駄にするなんて」

ポツリと少年は呟く、少女は、半開きの視線を少年に向け、キスを続ける。

「ん……世に秩序を与える魔王ベルを召喚するなんて何て愚かでしょう。神の代行者を呼ぶなど……恐れ多いことです」

「アマネ。神すら使役する僕は神の代行者と言えるのだろうか。何億年経っても僕は一番僕が理解できない。魔王となったあの日から……わからない」

少年――ベルの王。魔王ベル。彼は永劫の時を生き、それでも答えを見つけられないでいた。人々に天罰を与える神の代行者として仕事をただ執行してきただけの存在。何も考えず、永劫の時を生きてしまった破綻者。人間で在った時のことなど、既に忘れてしまっている。

少女――天使レミエルを宿した人間。レミエルアマネ。永劫の時を、ただ主上であるベルを思い続けた少女。存在価値がベルに依存し、愛し続けることだけをさだめとして生き続ける彼女。そんな彼女もやはり、破綻者であろう。

「西暦千年……一体どれほど時を遡って召喚されたのか……。ユグドラシルの接続も薄い。どれほど下位世界に呼びだされたか……」

「戻れますか？」

「戻らない。幸いにして、この世界には第五千九十八億二千五百三十二世代のユグドラシルの根がある。戻ろうと思えば出来るが……あの世界はもう終わりだ。戻ったところで何もない。全ては僕の中にあるんだから、既に終わってるかも知れない」

ベルは空の一点を見つめ、呟いた。

その青い空を目に焼き付けるように。彼の世界では、既に無くなってしまった青を。赤一面で覆われたあの世界を思い出し……。

「アマネは帰るか？」
「いいえ……わたしはいつまでもベルと一緒に……んっ」
無表情ながら、キスをする少女。多分に愛情を含んだキス。
ベルは天を仰いだまま、目だけで視線を左上空へ移した。
「下位世界に何ようでしょうか？」
しわがれたような声。数多の天使や神を引き連れ、声をかけてきた一人の老人。
「……この世界の神か」
ベルはそれだけ呟き、視線を天に戻す。
アマネは神を睨みつけ、口を開く。
「我々の贋作ごときが何のようでしょうか？　命令権は常に上位世界の神にあります。最上位世界の我々に意見を？」
「失礼。それでも我々はこの世界の管理者。勝手に行動されては困ります」
フっ、と笑いながら、神は言い切る。
「神と言いながら……仕事もしないでこんなときだけ出てきたのか。それに、この世界の神の代理は世界征服をしようとしてるんじゃないか？　実に有能な代理だな」
「……」
淡々としたベルの問いかけに、神は引き攣った笑みを浮かべる。

ベルはユグドラシルと繋がっているため、情報だけなら誰よりも持っている。

「ですが、我々は異分子を認可出来ない。最悪排除しなくてはならないのだが？」

「勝てるとでもお思いでしょうか？」

「上位世界の神と天使一人ずつならば」

そこでベルは初めて笑った。くすくすと、バカにするように。

神はその笑いに眉をひそめる。

「何がおかしいのですか？」

「何も分かっていない。誰が二人だけと言った？」

パチンと、ベルが指を鳴らすと、空中に現れる膨大な数の神や天使、それだけではなく、悪魔や魔人、精霊や妖精もいる。

「この数のオリジナルに、貴方方レプリカが勝てるとでも？」

アマネの問いかけに、神は冷や汗を流す。圧倒的な力を誇る上位世界の神々が現れたのだ。妖精ですらこの世界の最高神を超える実力を保持するオリジナル。

「い、一体どこに！？」

「何処も何もずっと居たさ……僕の中に。僕の仲魔だしね」

ベルは初めて身体を動かした。そして、神に視線を移し、ほくそ笑む。

「喰らえ」

そして始まる捕食。一方的にオリジナルの仲魔が、レプリカを喰いつくす。悲鳴が辺りに響き渡る中、二人は無表情でその光景を見つめた。その瞳は何も写さず、静止物を見るのとなんら変わらない。

「もういい……。なあ、お前達。僕はこの世界に残る。お前たちは帰るか？」

レプリカを喰らいつくした仲魔達が、ベルに頭を垂れる。中には数百メートルを超える者もいる。ルシファーやアマテラス、ヤマタノオロチやケルベロスなど、多種多様な仲魔達が一人の王に頭を垂れる。

『我々はベルの王と共に』

「……ありがとう。これからよろしく。庭園に戻ってくれ」

その言葉で仲魔達がベルの中に入りこむ。アマネのカルネジアン庭園の様な、精神世界の庭園。そこが今の仲魔の唯一の居場所。

「ベル……」

「ん？」

「見つけてみましょうか……ベルの幸せ。管理者としてじゃなく、人間として」

「……」

アマネのその言葉に、ベルは黙りこんだ。もう覚えていないのだ。人間としての自分を。罰を与え過ぎた自分が、平和に暮らせるなどと思えない。闇魔であるヤマですら従えてる自分は地獄に行けず、死の概念すらない、と。

「幸せって……なんだ？」
「ですからソレを見つけましょう。なんだったらわたしと子を成してもいいでしょう。王と天使の子ならきっと可愛いと思います」
「……アマネとは何度もしてるけど子供が出来たことないけど？」
「「……」」

きっと出来ないのじゃないかと考え始めていた。何万回身体を重ねているかわからない。それでも出来たことがない。一時は子を欲したこともあるが、既に諦めている。

「ＭＰで作れば出来るかもしれません。最悪二身合体で」
「融合したら子供じゃなくなる。お前も僕も消えちゃうし」
「他の神でしたら……」
「前に処女神と試せってお前が言っただろ。アテナも無理だった。悪魔も精霊も妖精も無理。多分無理だ」

存在が違いすぎたのだ。ユグドラシル全てを統べる管理者と、たかだか神では存在が違う。作ることは出来ても産むことは無理。

「でしたら……人間か、人間の子供を」
「別れはつらいよアマネ。寿命が違いすぎる。アクロウやユウが死んだ時、危うく暴走してユグドラシルに繋がった全ての世界破壊しそうになっただろ？　それから人間とは極力関わらないようにしてきた」

封鎖された首都東京の時、ベルの王になるしか世界崩壊を止めることが出来なかった。その唯一の理解者であった友人を失った時、ベルは暴走した。いくつかの世界が消え去った人為的大災害。

「でしたら……見つけましょう。永劫を生きる人間を！　そうすれ

ば人間を理解出来ます」
「……僕ですら変えられないユグドラシルの法則を変えられるならな。永劫を生きる人間などいない」
「きっと見つかります！　ダメでしたら、わたしが永劫を生きる人間として転生しましょう！」

ベルはため息をついて、アマネの頭を撫でた。
アマネは天使を宿しているだけで人間だ。だが、結局天使に引っ張られ、永劫の時の間に天使になってしまった。そして、ベルは元人間の魔王。二人とも人間では確実に無くなってしまっている。それでも、一条の希望にすがり付きたかった。壊れてしまった自分でも、人間のようになれるなら。

「見つかるといいな……見つかったら子供にしよう。僕もアマネもいい歳だ。子育ても悪くはない」
「はい♪」

もう何十億、何千億。下手したら兆を生きているのだ。身体年齢がお互い十六歳だろうと関係ない。

「まずはどうしよう」
「西暦千年ですしねー……暇ですし魔法覚えましょう。此処の」
「別にメギドラオンまで使えるんだからよくないか……？」
「暇潰しです。後、人間として生きるわけですから、ユグドラシル管理者権限を一時封印しましょう。どうせすぐ復帰できますし」

ベルはアマネの言う通りに管理者権限を一時閉じた。力でもそうだが、世界の情報が勝手に流れてきてしまうので、過去も未来も見えてしまう。そんなもの人間ではない。別名アカシックレコードとも言う。しかし、アカシックレコードがユグドラシルの一部を覗く

だけなのに対して、管理者権限はまさしく天文学的数字の世界を己のままに管理できる。そんなもの人間としてやっていくには邪魔すぎる。

「仲魔も封印するか？」

「それは……寂しいですし。ずっと出れないと可哀そうですからそのままで」

「……はあ」

何とも調子のいい人間である。そもそも、寿命が永久だから人間ではない。更に神や元魔王ルシファーやロキを従えている人間など居るはずもない。しかし、ベルも寂しかった。途方もない時間を共に生きてきた仲魔なのだから。

「ユグドラシルに繋がないと、この世界の魔法わからないけど？」

「えーっと……使ってる人から盗む？　それか自分で作るか」

「……作った方が早い。出来るだけこの世界に合わせて作ればいいだろう」

ふと、ベルは何故この世界に呼びだされたのか疑問に思った。召喚した人間は死んでしまったし、結局わからなかった。一定以上の力を持つ存在を召喚した場合、一度倒さなければ御せない。なのに、召喚しただけで生命力まで根こそぎ無くなって死亡したなど、何て愚かだろうか。大方、世界統一でもしようと思ったんだろうと結論付け、二人は当てのない旅を続けることにした。

## ００１　召喚されて（後書き）

女神異聞録デビルサバイバーのＳＳが一個もなかったから書いてみました。

## ００２　魔法開発。（前書き）

今までにないシナリオ……ならば基礎から構築してしまおう！
って感じです。

## ００２　魔法開発。

――――砂漠のオアシス

今現在、ベルとアマネは砂漠の中のオアシスにいた。理由としては、砂漠が一番魔法の練習に効率がいいからだ。あれから百年程経つが、相変わらず幸せなんて手に入らない。不老の人間など居なかったのだ。

そして、人間を大幅に勘違いしたまま此処まで来てしまっている。

「ベル、自然効果スキルは何をつけておりますか？　人間レベルって言うのがよくわからないのですが」

「んー、真・全門耐性。物理反射。さすがに魔力無効は持ってる人間いなそうだし」

「なら、わたしも同じ物にいたします」

人間と言う物を大幅に二人は間違っていた。しかも、魔力無効こそ人間で持ってる者が居たのだ。マジックキャンセルと名前が違うが、効果は同じだ。

真・全門耐性――万能属性以外のダメージを半減。万能属性はベルが作った魔法しかなく、現状全ての相手の攻撃が半減と言うことだ。

物理反射――読んでその通り、体術や剣術のダメージをそのまま相手にはじき返す術だ。こちらがダメージを負うことがなく、そのまま跳ね返してしまう。これと、魔法無効があれば実質ダメージを喰らうことがない。

そして、二人は途中であることに気付いた。この世界には精霊が居るが、魔法がなかった。仕方がないので、二人は魔法を作りだし、世に広めると言うことを考えついた。此処が後の魔法世界と呼ばれる世界になるのは、まだまだ先の話だ。

「アマネ。ちょっと僕が作った魔法見て。よさそうなのできたから」
「いいですよ」

そこで、ベルは手を天に掲げた。

「燃える天空」

そして空を真っ赤に染め上げた。比喩ではなく、空が全て燃えている。一気に酸素が消え始め、見た目からしてもうやばい。

「待って頂けませんか！？」
「え？」

慌てたアマネのストップ宣言により、そこでベルは手を降ろす。

「今のだと世界崩壊レベルでございます。そもそも、その魔力は人間では不可能です。威力を弱くいたしましょう」
「んじゃ……燃える天空」

今度は広範囲が燃えたが、それでも広範囲魔法程度だ。

「うーん……威力は申し分ないのですが……ダメですね。魔力消費が多すぎます。あ、そうです！　カドゥケウスの杖みたいな補助道具で増幅すればいいんじゃないでしょうか？」

「持ってないぞ……あー、ノルンにユグドラシルまで行って持ってきてもらうか。徴収したから置いてあるはず。ノルン行って来てくれ」

買い物に行って来い見たいな気軽さで頼み、暫くするとノルンは戻ってきた。

「王。これでよろしいでしょうか？」

持ってきた杖は、蛇が絡みついたようなデザインの物だった。感じる力の強さは、さすが神代の物と言えるだろう。

「ん。ありがとう」

「いえ。王の為ならどのような事でも、では」

笑顔を浮かべたノルンは、空気に溶け込むように消えてしまった。その場に残ったのはカドゥケウスの杖だけだった。それを握りしめ、再度魔法を使う。

「さて……燃える天空」

先ほどと同じくらいの炎が上がった。それを見て、満足そうにベルはアマネに視線を移すが、ダメらしい。

「確かにほぼ魔力を消費しておりません。それでも人間にはつらい物でありましょう。この世界で言う、大精霊自体を使役しているベルだからこそ出来るのです。普通そこまで精霊が集まってきませんよ」

「どうすればいいのさ……精霊に対するお願いの言葉でも決めるか？」

「いいですね！　始動キーって名前にしましょう。出来るだけ手伝ってあげて、と精霊に命令しておけばよろしいのです」

ベルは少し考え、もう一度カドゥケウスの杖を握りしめた。

「バ・ベル・イザベル・ベルイアル　燃える天空！」

先ほどと同じ魔力量だが、二倍ほどの大きさが燃え盛る。

「……詠唱がベル神の名前を言っているだけですが……気分的にはいいです。ですが、もう少し訴えかけことが必要です。精霊に呼びかけてはいるのですが、どの精霊かって言うのと、どのような魔法かって言うのが出来ておりません。今のは集まった精霊を一気に移動して形にしているだけ。感応力が高くないとダメですね」

ベルは更に頭を悩ます。これ以上出来るのかと。例えば今のだと火の精霊だから火の精霊だけに集まってもらい、形を教える。

「んじゃもう一回。バ・ベル・イザベル・ベルイアル。ト・シュンボライオン・ディアーコネートー・モイ・ホ・テュラネ・フロゴス・エピゲネーテートー・フロクス・カタルセオース・フロギネー・ロンファイア・レウサントーン・ピュール・カイ・ティオン・ハ・エペフレゴン・ソドマ・ハマルトートゥス・エイス・クーン・タナトゥ・ウーラニア・フロゴーシス」

大きな炎が現れ、辺りの砂漠から更に水分を消し去ってゆく。魔力消費も少なく、精霊も迷わずに出来たようだ。

「わかりにくいですね。多分日本語でも出来ますよ。わたしもベルも日本出身ですから、日本語で行きましょう」

「なんて我儘だ……バベル・イザベル・ベルイアル。契約に従い、我に従え、炎の覇王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を、死の塵に　燃える天空！」
「あーー！　だからめんどくさくなってそのまま魔力解放はダメですって！」

ベルは魔力を抑えるのがめんどくさくなり、また空を燃やした。アマネは慌てて炎を消し飛ばす。

「とりあえず書いてといて。後で町に情報を流そう。あと初歩的なのも考えた。精霊をそのまま一匹飛ばすって魔法」
「大精霊はダメですよ？　世界が消えちゃいます」
「わかってるって……光の一矢！」

精霊が高速で飛翔し、直系一キロ近いクレーターが出来上がった。

「魔力出力間違えた。と言うか、勝手に精霊がくっついて千矢くらいになったから失敗」
「でも、人間ならちゃんと出来そうですね。名前は魔法の射手でどうですか？　矢ですし」
「いいね。んじゃそれで書いといて。後は増えたらどんどん流していけばいいか。これでこの世界の人も龍みたいなのに怯えなくて済みそうだ」

ベルとアマネが色々回ってわかったのは、何故かこの世界には幻想種や、亜人がいる。人間を食べるのはいいが、カースト制度が壊れかねない程だと困るのだ。星の管理をしているだけあり、そう言うのは見逃せない。だからこそ、自分たちで討伐する力を身につけてほしかった。逆に人間が討伐しすぎた場合、人間を殺して数を合

わせる、もしくは人間以外を強化しなくてはならない。

「さてと。ご飯にするか」

「はい」

カドゥケウスの杖を適当な仲魔に渡してしまい、オーディンからグーングニルを借りる。

「んー……あっちだな。昼食は竜……だッ！」

ヒュンとグーングニルを投擲すると、一瞬でそれは見えなくなった。

「戻れ」

次の瞬間、竜が刺さったグーングニルが手元に戻ってくる。

「ホント神具の無駄遣いですよね」

「これが便利なんだよ。狙った獲物には必ず当たる因果逆転＋持ち主に戻る……しッ！」

更に同じことを繰り返し、合計五匹の大きな竜が集まった。

「燃える天空っと」

先ほど作った魔法を使い、竜の周りを炎で囲み、あぶり焼きにする。

「さーて、皆出て来い。もっとほしい奴は自分で取ってこいよ？」

次の瞬間、全ての仲魔が現れる。かなりの広範囲にわたり、現れたせいで、空間がピキピキと割れ始めたので、慌てて力を押さえるように言う。

「王よ。我の秘蔵の酒を献上するぞ！」
「おお、ハスターの酒はうまいから好きだ」
「ガハハ！　そうだろそうだろ！　気分がよい！　皆に黄金の蜂蜜酒をふるまおうではないか！」

大きな鳥のビヤーキーが黄金の蜂蜜酒を大きな樽に入れて大量に運んできた。ソレを見て、皆から声が上がる。

「ずりーぞハスター！　お前だけ王に取り入ろうなどと！」
「そうよ！　抜け駆けは禁止って言ったじゃない！」
「……そろそろ殺しましょうか？」
「よし、ワシはメデューサーの首を献上……」
「死にますかお父様？」
「貴方、いい加減にしてくださいませ」
「ぐすっ……」

ゼウスがメデューサの首を取り出そうとし、娘であるアテナと妻のヘラーに怒られている。最高神なのに娘と妻に頭が上がらないようだ。そもそも、メデューサの首など出されたら、力が弱い物は石化してしまう。迷惑きわまりないおっさんだ。

「あー、力の弱い仲魔は黄金の蜂蜜酒は薄めて飲んでよ？　きっと死ぬ」
『おーーーー！！』

まだ料理も出来ていないのに、皆は酒を飲み始めるが、バタバタ

と倒れてゆく。

「だから！！　薄めて飲めって言っただろ！　妖精なんて小さいんだから無理！」

「だいでーぶでふよー、全然ようーれす！」

「ピクシーが原液で飲むな！」

一瞬にしてカオスになってきた食事風景に、ベルは叫び続ける。

アテナが幼い身体でベルに言いより、ソレを見たゼウスは咽び泣いている。

既にアテナとは身体の関係を持っているのだが、一応処女神って事にしてあるらしい。

「みなさーん！　ユグドラシルの実持ってきましたよー」

『しゃーーー！！』

ノルンが持ってきた大量の大きな黄金の実を、皆が食べ始める。そして再度倒れてゆく。

「だからヤメロ！　女神と神以外が食えるわけないだろ！　知識の塊だぞ！」

「あふー……頭がクラクラすう」

「何でアマテラスまで知識酔いしてんだよ！　お前かなり上位の神だろうが！」

更にカオスになってゆく各々にベルは叫び続ける。精霊が許容量を超えて爆発したり、女神がベルを誘惑したりおかしな展開になってしまっているのだ。

「ギャハハッハ！」

「クー・フーリン！　お前ゲイボルク誰のケツの穴に投げ込んでんだよ！」
「ボクでーす、あはははは！」
「返事しなくていいスレイプニル！　お前それでも聖獣か！」
「スレイプニルさんは性獣なんですよー。ちなみにわたしは性人。どうですー？　新鮮です」
「黙っとけアリス！　脱ぐな幼女メイド！　ほら、霊体が出てるから！」

文句を言いながらも、ベルは皆の世話をして走りまわる。皆が王と呼ぶのはそのせいでもあるのだ。もちろん実力でも圧倒的なのだが、皆の父のように世話をする。相談に乗ったり、遊んだり、平等に接する態度から、皆はベルが好きなのだ。力が強いだけで神々が従うはずなどないのである。

「おいビシャモンテンとジコクテン！　全裸で筋肉比べなんかするな！　下が立派過ぎてみたくない！」
「だいじょびです王様。わたしは王様ので満足しまふ」
「脱ぐなアルテミス！　後アテナもアマテラスも脱ぐな！　お前ら一応処女女神だろ！？　むしろ露出狂だぞそれは！」

ベルはばさばさと三人に布をかぶせる。そして、疲れて座りこむ。

「ベル。なんとなく人間っぽいですよ多分。此処百年で随分振り回され……人間っぽくなりました」
「言い直さなくてもいいよアマネ。僕自身振り回されてる自覚あるし。まあ、あっちだと皆別々だったからね」

そう言って、ほほ笑みを浮かべながら皆を見回す。百年前は、笑うこともなかったベルがである。その姿をアマネもほほ笑みながら

見つめる。この百年で、なんとなく、二人とも笑うようになっていた。

「皆仲良くなりましたよね。この世界に来てから食事は皆一緒ですから」

「そうだね。それは嬉しいかな。前は僕が順番に回ってたから、他の仲間と食事なんてなかったし」

「そのかーり。王様を独占でけません」

「んじゃ、アテナは今と前どっちがいいんだ？」

「んー……」

途中で会話に割り込んできたアテナは、唇に指を当て、少し考えるが、すぐに笑顔に変わった。

「今！　やっぱり多人数がたのしーですねー。子作りけーかくがなくなったのは残念」

ベルとアマネは顔を見合わせ、苦笑した。だが、とても人間らしいとは言えない。結局周りは人間ではないのだ。ここら一帯に核が落ちてきても、無傷でいられるような者ばかりだ。

アテナは眠そうに目をこすり、かわいらしく口に手を当てて、欠伸を一つした。

「うー……ねむい」

「ん？　酔ったからだな。おいで」

「やった！」

バっと、アテナはベルに抱きつき、やがて、膝を枕にして寝てしまった。その金髪のさらさらの髪をベルは優しそうな目で撫で続ける。それを見たゼウスがまたむせび泣く。

「最近泣いてばっかだなゼウス」
「最近妻も相手してくれないのだ……娘にも親父臭いと……」
「お前がアテナの下着盗んだりしてるからいけないんだ……」

あきれ顔でベルが返すと、ゼウスは泣きながら走っていってしまった。
そこで、一匹の虎がベルの顔に花をこすりつけてきた。

「く～ん」
「ん？　ビャッコも眠いのか？　背中のあたりに来てくれると助かる」

背もたれとして、三メートルは在りそうな純白の虎が寝そべる。
最初はベルをぺろぺろと舐めていたが、やがて寝てしまった。

「まだ昼だろ？」

ベルの言葉を聞いたラーとコンスが立ち上がる。太陽神と月の神である。
そして、すぐに夜になってしまった。しかも完全な満月である。
二人が天体を移動し、強制的に時刻を変えてしまったのだ。

「天体弄ったのか……まあ、ありがとな」

ぱちぱちと炎がはぜる中、皆は思い思いに楽しんでいた。酒で酔って倒れている者が多いが。ベルはそんな様子を優しげに見つめていた。

「あー、アテナちゃんずる、あふっ！」

「はいはい。アリス静かに。アテナが起きちゃうから」
傍で叫んだアリスをベルは傍らに引っ張った。アリスはベルに寄りかかり嬉しそうに目を瞑る。
「くすっ……ピクシーもそんなところで見てないでおいで」
「！」
ピクシーはくるくると飛びまわり、ベルの口にチョンとキスをしてから服の中に潜り込んだ。
その姿を、アリスはじっと見つめていた。
それにベルは気がつき、軽くアリスにキスをして頭を撫でてやった。
アリスは頬を染めてから、嬉しそうにベルの胸に顔を擦りつけて、寝てしまった。

「ベルはキス魔です」
「ん？　どっちかと言うとアマネの方がキス魔でしょ？　俺は皆が可愛いからね。獣だって霊だって皆大切な仲魔。ん、お前もだよフェニックス。おいで」
フェニックスは嬉しそうにベルを通過する。炎で出来ており、実体ではないが、なんとなくベルにはキスをしたような気がした。もちろん、熱さはない。
「節操がないのですね……。そう言えばシルフやウンディーネ、サラマンダーともしておりましたね。シルフとウンディーネは女性型ですが、サラマンダーなんて完璧トカゲですよ？　せめて女性型にしてください」
「んー、それだと可哀そうじゃん。見た目だけで決められたら。あ

ーでも、ゼウスとかオーディンはやだ。おっさんは無理かな。クー・フーリンとかなら別にいいけど」
「思いっきり男性ですよそれ……」

ベルは苦笑しながら考えてみた。多分、人間と違うからなんだと。性別の差など、そこまで重要ではないからだ。恋愛感情なら女性の方がいいが、これは仲魔への愛情なのだと。ただ、ベルは気づいていないが、アテナやアリスなどがベルに抱いている気持ちは恋愛感情である。ベル自身はアマネにすら恋愛感情は持っていない。仲魔として愛情があるだけなのだ。ただ、人間の恋愛感情程度に負ける愛情ではない。一兆年も皆でいるわけで、たかだか百年程度しか寿命がない人間とは絆が違う。

「ベル……んっ……」

アマネはベルに軽くキスをし、肩に寄りかかって目を瞑った。
アマネはベルを愛している。だが、ベルが恋愛と言う感情を知らないことも知っている。だから、自分以外とでもいいから恋愛を知ってほしかった。だけど、それは仲魔では無理なのだ。新しいファクターである人間以外では……。

やがて、ベルも目を瞑った。
願わくば、幸せな夢がみれますように。

―――翌日

ベルが目を覚ますと、皆がベルの周りで眠りこけていた。何故か皆女性だばっかりだが、これは男性も理解している。昔、ベルが人間性を失っていき、苦しんでいたのを知っていたのだ。だからこそ、アマネが言った恋愛を経験させてあげたいと言う思いを受け入れた。出来るだけ女性を身近に置き、ベルが恋愛を出来るようにと。天使や女神はまさしく人間レベルでは推し量れないほどの美女や美少女だ。だが、人間性を失っているベルには、これは仲魔としての愛情としか取れない。結局、効果は何千億年経ってもないのだ。

「起きたようだな」
「ん……オーディンか？」

ベルは小さく欠伸をしながら、瞬きを繰り返す。そして、何やらボロボロのオーディンとゼウスを見つめる。

「何したの？」
「ちょっと新しい技をな。ちょっと見ていてくれ」

そう言うと、オーディンはダラリと手を降ろした。

「右手に魔力、左手に気、融合」

オーディンは手を会わせ、二つを融合する。ブワっと、不可視の力場が広がり、周りの砂を巻き上げる。それで皆が起きてしまった。

「どうだ。相反し合う力を融合させることで出来る技だ。内と外に纏い、かなりの強化が出来る」
「すごいかも。あれ？　でも気なんて僕もってないけど？」

ベルはＭＰ＝魔力しか知らない。出来るわけもないのだ。

「うむ……。そう言えばそうだな」
「あ、自分妖力ならあるッスから手伝いますよ？」
「えーっと、わたしは神力ならー」
「オレは……えーっと天力？」
「ワシはなんだ……龍力？」
「私は精霊なら」
「……霊力いいよ」
「オレは鬼力？」

だんだんと適当に皆が手伝うと言ってくるが、鬼力や龍力などあるのだろうか。

「ふむ。ならば、種族ごとに力を貸せばいいのだ。皆種族ごとに力が違うのでな。神と女神ですら違うのだ」
「へー、やってみる。皆一度戻ってー」
『はい！』

皆の姿が消え去り、残ったのはオーディンとアマネ、ベルだけだ。

「とりあえず、力を出してくれるのは皆だからいいだろう。種族を言えば勝手にやってくれるんじゃないか？」
「皆、お願い」

ベルは一度深呼吸し、手を円の様に回す。

「大天使、女神、霊鳥、神樹、天使、妖鳥、妖魔、天女、邪神、凶鳥、妖樹、魔人、神獣、聖獣、幻魔、妖精、魔獣、地霊、竜王、死神、妖獣、邪鬼、妖虫、破壊神、地母神、龍神、鬼神、堕天使、妖鬼、鬼女、夜魔、魔王、邪龍、悪霊、外道、幽鬼、御魂、秘神、威霊、精霊、珍獣、偽人、魔人、狂神」

ぐるんぐるんと回すと、周りに色とりどりの球体が四十四個浮き上がった。

「よし、後はソレを一気に王の魔力で融合だ」

ベルは頷き、圧縮するつもりでどんどん固めてゆく。力が反発しあい、バチバチと紫電が走るが、構わずに纏め続ける。

やがて、それはベルの体内に入り込み、ベルの髪が真っ白に変色し、長くなってしまった。

「王……すごいのじゃが力を押さえてくれぬか……先ほどから周りの物質が消滅していってる」

周りを見ると、砂漠の砂がだんだんと消えてゆく。しかも、常時雷が走り、辺りに落ちている。空を見ると、黒雲が嵐のようにぐるぐると回っている。

試しに軽く前方に拳を突き出してみると、視界に見える範囲は全て逆三角形上に消え去った。

ソレを見て、慌ててベルは解いた。

「これは封印だ。多分攻撃しなくても続けたら星が壊れちゃう」

「うむ。それがよかろう。だが、気と魔力の融合はどうだ？　広め

てみぬか？」
「そうだね。アレならいいと思う。アマネ、町に広めるリストに書いておいて」

アマネが書いているのをしり目に、ベルは寝転んだ。
先ほどのアレが、異常に制御が大変だったのだ。一つミスッたら星が粉々になるかと思ったのだ。実際、仲魔達がはりきって、全力で解放してしまったのだから当たり前だ。抑えなければあの状態になっただけで星を破壊しかねなかった。

「皆……もう一度寝るね。一気に疲れた。出たい人は出ていいから……」

強烈な眠気に襲われ、ベルはすぐに眠りについた。
優しい仲魔達に見守られて。

## ００３　ベルの希望。（前書き）

すごい期間空いてしまった。

## ００３　ベルの希望。

――――ある村。

あれから百年の時が流れた。
そして、ベルは悩んでいた。
確かにベルは人間らしく生きることを願った。しかし、ベルは管理者でもあるのだ。神を殺してしまった今、世界の管理はベルがするしかないだろう。
そして、今ベルが悩んでいるのはまさに管理者の仕事についてだ。大雑把にいえば、人間のこと。
人間は食糧供給に、竜などとは対峙せず、真っ先に弱い生き物を食料として狩りだしたのだ。その結果、その種族が絶滅しそうになった。ならば管理者のすることは一つ……人間狩りだ。
注意を何度もしたが、聞く気がないのか動物の狩りをやめなかった。農業を教えたが、手軽な狩りを選んだ。ベル達は甘く見られていたのだ。人間は、生まれながらの高慢さで、魔法が使えるのだから、自分達が頂点だと思っていた。
それに仲魔達が怒り狂った。そして、ついに大規模な戦争がおこった。仲魔と人間の戦争。
人間は魔法を使うが、魔法を広めたのはベルである。そして、存在の頂点にいる者達が負けるはずもない。
結果、人間達はなすすべもなく蹂躙された。全人口の半分が亡く

なると言う最初にして最後の大戦争だった。
脅すような形で、まじめに働くように言い聞かせ、人間側はそれを了承した。
魔法を無闇に使うことは禁止し、正しいことに使えと言い聞かせた。
そして、何故かベルは賞金首となった。犯罪者としてではなく、倒したら世界を手に入れられると言う理由でである。この時代の貨幣である金貨一千万枚の大金の賞金首だ。それでも、ベルを狙う者はいなかった。勝つことなど出来ないと皆が悟っていたのだ。
魔法使いの根源。これが人間達の認識。
実際は全ての根源と繋がっているのだから、更に上だろう。

そして、ベルは一つの国を作った。『ウェスペルタティア王国』。
別に王となりたいわけではなく、教育機関として作ったのだ。正しい方向へ、魔法を伝えてほしいと。
そして世界初の魔法学院を創設した。
作った魔法を伝え、更に体術や剣術を教えた。それ以外にも、狩り以外の生活基盤も教えた。

後は、此処、魔法世界と地球の繋がりのことを教えた。
地球には魔法体系が存在しない。独自の世界の進化を遂げた地球に害を与えぬよう。魔法は秘匿することを義務とした。そして、先に出来た地球を旧世界とし、旧世界で一般人にバレた場合、オコジョにする儀式を作りだした。これは、ゼウスかふざけて作ったものだ。その後、娘のアテナと妻のヘラーに縁を切られて号泣していた。

現在、ベルはウェスペルティア王国のソファーで寝転がっている。
いい具合に人間くさく堕落したと言っていいだろう。

「なあ、ネルラシア。最近街ではキスが流行っているのか？」

ベルは近くにいる秘書である男性――ネルラシアに、声をかけた。建国当初に、魔法無効と言う特殊体質に興味を持ち、秘書としたのだ。

「はい。と言うより、王が街でアマネ様とキスをするから流行っているんですよ。何でも仮契約とか」

「仮契約？」

ベルは不思議に思い、ソファーから起き上がった。ベルが作った魔法ではなかったからだ。

「はい。主と従者として契約するとか。魔法研究所の人間が作りだしたらしいです」

「ほう、やるなぁ……詳しく説明しろ」

ベルは人間が作った新しい魔法に興味を示したのだ。

今までの魔法は全てベルが作ったものであり、人間の力と言うのも見てみたかった。

「まず魔方陣を敷き、その上でキスをすればいいだけです。本契約の場合交わればいいのですが、本契約は生涯一人としか出来ません。仮契約ならば何人でも大丈夫です」

「へー……利点は？」

「仮契約の場合、カードが一枚出、ソレを二枚に分けます。オリジナルを主が持っていれば、いつでも従者を近くに呼び寄せられます。更に、従者に専用の武器『アーティファクト』が授けられます。これは、心の武器と言うか、心を形にしたような物ですね。それを、魔力として物質化しているのです。後は、主から従者に魔力を分け与えることが出来ます。本契約は相互契約で御座います。言わば夫

婦の様ですね。お互いにカードが現れ、片方からもう片方を呼べます。全て仮契約の相互版みたいな感じでしょうか？」

ふむ……とベルは深く頷いた。

「ネルラシア、ちょっとアマネと本契約するから魔方陣しいてくれ」
「は、はい」

男性は少し顔を赤らめ、部屋全体に魔方陣を敷き終えた。
ベルとアマネが言ったわけじゃないが、敷いた後にそそくさと部屋を出てゆく。

「アマネ。早速やろうか？」
「はい♪」

それから暫く身体を重ね、気がつくと床に二枚のカードが置かれていた。いつ出たのかすら気付かなかった。
ソレを二人は手に取り、しげしげと見つめる。自分の姿が写っていたのだ。写真技術もないのに、なんで出来たのだろうと。
よく観察してみると、どうやら魔力で出来ているようだ。魔力の波長を調べると、絵柄は、相手が契約相手の事をどうみているかで変わるようだ。カードの中のベルの服装は、ユグドラシルの管理者をしていた時の、白い服装だった。

「ふーん……背後にユグドラシルの樹ねぇ……しかもプラチナカードか？　きらきら光ってる。レアカードみたいだ」
「わたしはユグドラシルの加護……あ、ベルはユグドラシル管理者ですね。そのままです」

二人は何か能力がついていないかと思い、カードを読み取るった。

ベルは、意外に面白い能力でほくそ笑む。

「指定箇所からの転送だな。管理者権限もついてるけど、そんなの元からあるし。ユグドラシルの根の倉庫と、庭園から簡単に道具が取ってこれるのはいいかもしれない」

「わたしは星による自動防御と魔力・体力回復ですね。いまいちです」

更に見てゆくと、右上に虹色と書いてあった。ベルがアマネのカードを覗いてみると、同じ所に金・銀と書かれていた。

「ふーん。でもこんなのが人間に使えたら世界の法則が壊れかねないぞ。少し干渉して弱めよう。危険すぎる」

「ですね。ユグドラシルアクセスなんて出来たら大変です」

二人はわかっていなかったが、ユグドラシルへの接続など、この二人以外出来るはずもないのだ。管理者と、その相互契約で結ばれていたからこそ出来ただけである。そうとは知らず、本契約の力を弱めてしまった。

「まあ、良く出来たシステムではあるな。作った奴に褒美を取らせるか。これからも色々魔法を研究してほしい」

「人間が考えた魔法って興味がありますよね」

そう言って二人は、自室にあるお風呂場に向かった。

――――更に百年。

「旅に出よう」
「はい♪」
「ちょ、ちょっと待ってください王！」

いきなり呟いた二人に、執事服の男性は、慌てて止める。
既に故人であるネルラシアと言う男性にそっくりだ。

「何だ、リオストシア」
「この大国の王ですよ！？　そんなことが出来るはずがないでしょう？」
「元々王になりたかったわけじゃないんだよ。そもそも、何故こんなデカイ国になってるんだ。最初は村程度の国だったぞ？」

作った当時は王国などでは全くなかった。だが、ベルが作った政策によって国は大きくなりすぎてしまった。そのせいで責務に追われ、人間らしくなど出来ないと思っての行動だ。
人間らしいのだが、敬われては意味が無い。

「王が保護して作ったヘラス帝国もどうするんですか！　まだ小さな国です。潰されてしまいます」
「ん。後は任せたレイズ・リオストシア・エンテオフュシア王」
「何で私が王なのですか！」

いきなり王に指名され、レイズは慌てるが、ベルはどうでもいいとばかりに荷造りを開始する。
ベルはユグドラシル（あまねく世界）を管理していたのだ、一国

の王程度いつでも捨てられるのだ。そもそも、国の経営は軌道に乗っているのだから、何も問題はない。リオストシアも有能で、王としての器を有している。

「ヘラス帝国はうちが守ってやればいいだろ。安心しろ、千年以内には帰ってくる。遊びにな」

「私は死んでおります！」

「子孫に会いに戻ってくるわ。楽しみだなー。あ、僕は一文無しだ。金をくれ……」

「はぁ……」

ベルに何を言っても無駄だとわかり、レイズは大金が入った袋を大量に持ってくる。

「そんないらない。僕に渡す金があるなら、区画整理にでも使ってくれ。調味料買うだけだからその小さな袋だけでいい」

ベルは一番小さな袋――十万£くらい入った袋を受け取る。これでも、日本円にしたらかなりの大金だ。１£＝１７４円。二千万近い大金である。だが、何百年も旅をするわけだからこれくらいはほしい。

「んじゃ、行ってくる」

そう言って、ベルはアマネを連れ添い、カドゥケウスの杖を持って窓枠に足をかけた。

「王！」

「ん？」

ベルが振り向いた先には、深く頭を下げ、涙をぼろぼろとこぼしすレイズが居た。
一瞬ベルもアマネも驚き、視線を交差させたが、やがて優しげな笑みを浮かべた。

「ありがとうございました！　あなた様のおかげで、私達は幸せでした！　この国をよりよい国にすることを、私は誓います！」
「……ありがとう、レイズ。先々代から僕にずっと尽くしてくれて。僕は人間と言う者を少しだけわかった気がするよ。レイズの子孫にあったら、伝えておくよ。お前達がどれ程国の事を思っていたか。さよなら」

フ、っと笑い、ベルとアマネは窓の外に飛翔した。
建国当初ではあり得なかった、にぎわった眼下を見つめ、東に飛翔する。

―――旧世界：地球

あれから１００年ほど経ち、現在ベルとアマネは旧世界に来ていた。

最初は日本に行ったのだが、知っている日本とは違いすぎて、すぐに世界中を回ることにした。
歴史的には魔女狩りが始まっていたのだが、勝手に魔法世界から出て行って、旧世界で禁止されていた魔法を使ったのだから助けない。ベルはあれ程秘匿しろと言っていたのだから。

「世界中回って飽きたな……」
「やることが在りませんね」

完璧に二人は飽きていた。魔法無しで戦争に介入したりしていたが、結局飽きたのだ。面白いことを探し、二人はひたすら歩きまわっていた。

「ベル、見てくださいアレ。村が燃えてます」
「へー、燃える天空……いや、燃える村。新しい魔法か？」
「そんな物騒な魔法があったら驚きです。それにしても、魔法ですかね？　魔法だったら術者を殺しましょうか。旧世界であれは許せません」
「んじゃ行こう」

二人はのんびりと、燃えている村に歩みを進めた。

―――燃えた村

村が燃え盛る中、一人の少女が、教会で膝を抱えて泣いていた。
まだ幼い、膝まであるふわふわウェーブがかかった金髪の少女だった。
齢は十〜十二程度だろう。無機質な青い瞳が、炎を映しこんでいる。

「どうして……ぐす……」

少女は意味がわからなかった。
いきなり父親がおかしくなり、悪魔に取りつかれたように変貌した。
そして、ある儀式を施されてしまった。『吸血鬼化』。人間を真祖の吸血鬼とする実験である。手にするのは人間には過ぎた力。そんなもの、幼い少女が制御しきれるわけがない。
魔力が暴走した少女は、村を闇で飲み込んだ。人は全て死に、残ったのは燃え盛る村。
そして、吸血鬼となった少女だけだった。

「何でこんなことに……」
「何でだろうな」
「ッ！？」

少女はバっと顔を上げた。
一人しかいないはずの教会に、声がしたのだ。
辺りを見回し、二つの人影を見つけた。
大きな十字架の上に座っている、二人の男女。
ベルとアマネの二人が、少女を見降ろしていた。
魔王と天使のおかしな二人組が。

「あ……うぁ……」

少女は恐ろしかった。その圧倒的な存在が。

吸血鬼になった少女にならわかる、圧倒的な魔力を纏い、神秘を持つ存在が。

「君が魔法使いか？　随分と可愛い魔法使いだ。だが、さすがにやりすぎじゃないか？」

「た、助けて……誰か……い、いや……」

ベルの無機質な視線に、少女は涙を流しながら後ずさる。だが、腰が抜けて立つことすらできない。

勝てない。不老不死となった吸血鬼だとしても、この青年と対峙したら、瞬きする間に魂ごと殺されてしまう。本能で理解し、純粋な恐怖が少女を襲う。

「誰かって……殺したのは君だろ？」

「や……イヤ……来ないで……来ないでーーー！」

ブワっと闇がベルに襲いかかる。純粋に魔力だけの奔流。魔法ですらない。

ソレをみたベルは眉をひそめる。

闇はベルの直前で、パシンと消え去る。

少女はその現実に、表情を絶望で彩らせる。

村ですら覆い尽くした闇が、まったく意味をなさないのだ。勝てるわけが無い。

「な、なんで……」

「待って。ちょっと、質問していい？　君は魔法は使えないの？そんな魔力の無駄遣いしか出来ないの？」

純粋におかしいと思った。威力も出ない、その上魔力を膨大に消費する。杖すら持ってないのだ。魔法使いならまずありえない。しかも、これだけ魔力を使っても平気な存在を知らない。
魔力無効だけならレイズの家系もそうだから知っていたが、これはあり得ない。

「わ……わ、わわたしは……魔法使いじゃない」
「？　そもそも、君は人間？　レプリカじゃないの？」

結果、導きだされたのは、神の模造品ではないかという疑問だった。

「……吸血鬼」
「吸血鬼？」

ベルは吸血鬼を知らない。そんな儀式魔法作ってもいなければ、オリジナルにも居ないのだ。

「地球のオリジナル、か……」
「え？」

ベルは十字架から飛び降り、少女の前に移動する。

「君は……吸血鬼になりたかったのか？」
「そ、そんなこと……父様に無理やり……」
「ふむ……ならば死にたいか？　死ねば輪廻に戻れるはずだが」
「い、いや……まだ、死にたくない。怖い」

自分からなったのならば、今すぐにでも殺そうと思った。

だが、この少女は被害者。ならば殺しはしない。
吸血鬼なんて、さすがのベルでも理解出来ない。ユグドラシルを使えば理解出来るだろうが、人間として生活するのに、封印してしまっている。

「吸血鬼とはなんだ？」
「人間を、こ、超えた魔力と身体能力……不老不死……」

そこで、ベルはバっと背後のアマネを振り向いた。
アマネは目を見開き、すぐにほほ笑んだ。
それにつられて、ベルもほほ笑む。そして、少女に視線を戻した。

「見つけ……ついに……」
「え……？　キャッ」

少女の脇の下に手を入れ、ベルは少女を優しく持ちあげた。
その顔には、満面の笑顔が浮かんでいた。そして、涙が一筋頬を流れていた。

「名前は？」
「え？」
「名前はない？」
「エヴァンジェリン・アナタシア・キティ・マクダウェル……」

ソレを聞き、ベルは首を傾げる。

「君――キティの父親はいきなり豹変したと言ったよね？」
「あ、はい」
「それだとおかしい。ミドルネーム――アナタシア・キティ。これは不死の子猫って言う意味だよ。つまり……最初から吸血鬼にしよ

うとしていたとしか考えられない」

その言葉を聞き、キティの顔がだんだんと真っ青になってゆく。悪魔に憑かれたと思っていた。だが、それだと……十二歳の誕生日を迎えるまで、偽っていたと言うことだ。最初から不死の猫（実験体）として……。

「そんな……わ、わたしの……産まれてきた、意味は……」

「……」

絶望に涙するキティを見つめ、ベルはほほ笑む。

「キティ。これからはエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルを名乗れ。不死の猫なんて名前はいらない。そして君は今日から……僕の娘だ」

「え？」

持ちあげていたキティをベルは抱きしめる。やっとみつけた不老の娘。死を知らない子猫。

今此処に、ベルは永劫彼女の面倒を見ようと誓った。

「僕はベル。キティ……いや、エヴァの父親だ」

「わたしはアマネ。あなたの母親です」

「え？　え？」

ほほ笑む二人に、エヴァは混乱する。いきなり現れた二人が、両親になると言いだしたのだ。混乱しない方がおかしいだろう。

「君の幸せに僕らがなろう。だから……僕らの幸せに君がなってほしい」

「永劫の時を生きるわたし達の希望」

ベルとアマネは、本当にうれしそうに、エヴァに言葉を紡いだ。
人間として生きる最後の希望を両手に。

「でも……わ、わたしは、吸血鬼……」

二人は苦笑し、エヴァに笑いかける。

「僕は魔王ベル。年齢は億を超えてから数えていない」
「わたしは天使レミエル。ベルの王に付き従う永劫の存在」

ブワっと、アマネの背中から、三対の純白の翼が現れる。教会に舞い降りた天使。そして魔王。
アマネの翼が、優しくエヴァを包み込む。

「い……いの？　こ、んな、わたし、でも？」
「エヴァだからこそ。一緒に永劫を生きよう」

白い羽が舞い散る教会で、エヴァは居てもたっても居られず、ベルに抱きついた。随喜の涙を流しながら、これから親となる青年に必死にしがみつく。絶対に離れないように。

「う……ぁぁ……あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！」
「ありがとう……産まれてきてくれて」

暫くエヴァは泣き続け、やがて眠ってしまった。
ベルはエヴァを愛おしそうに抱き上げ、教会の外に出る。

そして、一瞬で村中の炎を消し去った。

「皆出ておいで、今日は記念日だ。今日と言う日を忘れぬよう、盛大に宴を開こう」

そして現れる無数の仲魔達。
王の幸せを感じ、皆が秘蔵の食べ物や飲み物を持ち寄る。
此処に、歓喜の宴が開催される。

「王様ー、可愛い子ですね」
「うむ、さすが王の娘だ」
「ほっぺたぷにぷに。かわいーなー」

エヴァを仲魔が優しげに見守る。王の娘として、祝福を。

「皆の娘でもある。彼女に幸せを。誓いを此処に」
『誓いを此処に』

起こさぬよう、静かに皆が呟いた。
全ての困難から彼女を守るための誓いを。
全ての存在の頂点からの祝福を。
決して笑みを途絶えさせぬように。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1995k/

バ・ベルの王～幸せを手に～

2010年10月9日16時30分発行